

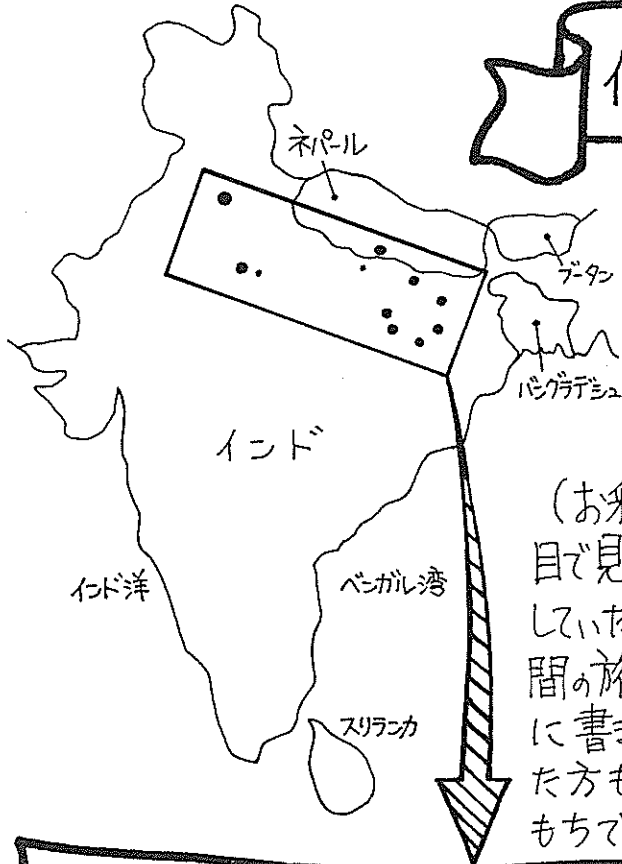
おかげさん

別冊

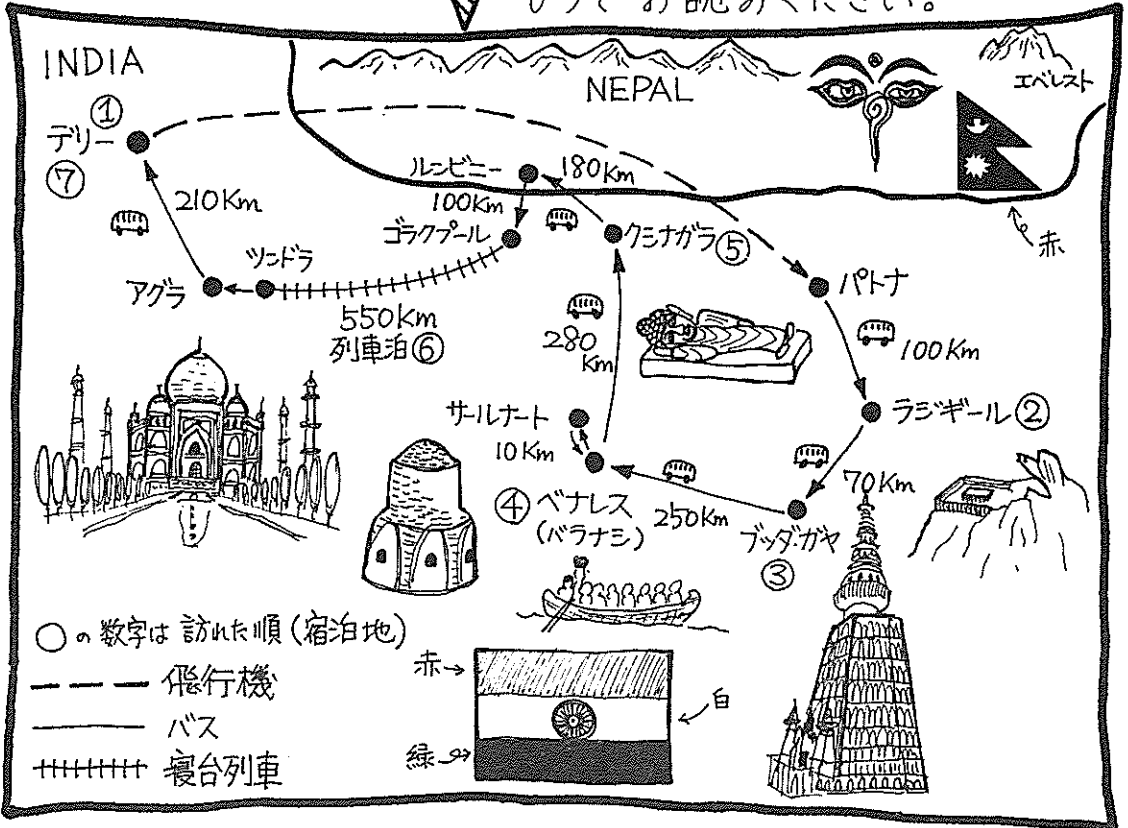
真宗大谷派
高德寺通信



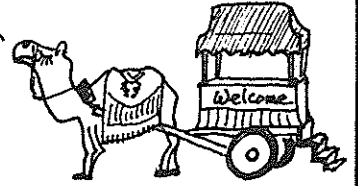
佛跡参拝・地図とルート



1998年2月私はインドへ行ってきました。参加者は全員真宗大谷派のお坊さんで20代～50代の男性14名。数年前から佛跡(お釈迦さまがたどられた道)をこの目で見てみたいとお坊さん仲間で話していたことが現実となりました。9日間の旅で見聞してきたことを、私なりに書き記しました。インドへ行かれた方も、まだの方もお気軽な心もちで読みください。



インドの諸情報



交通

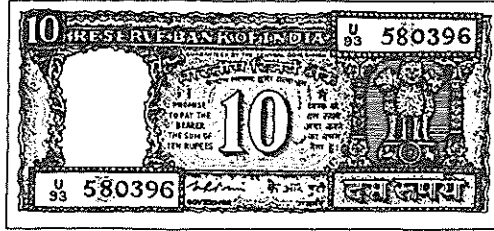
日本(成田)からデリーへはバンコク経由で12時間30分。直行便だと8時間。時差は3時間30分。

気候

10月から3月までが冬。日本の初夏・秋と同様の気候で観光のベストシーズンといえる。私が訪れたのは2月で雨にもふられず晴天が続いていた。昼夜の温度差が非常に大きく昼間はTシャツ一枚・早朝はダウンジャケットをはきる日もある。夏は4月から6月頃でとても暑いらしい。6月から9月頃が雨期となる。

通貨

通貨単位はルピー(Rupee)。1ルピーは100パイサ(Paisa)。紙幣は1, 2, 5, 10, 20, 50, 100, 500ルピーがあり、コインは50, 10, 2, 3, 5, 10, 25ルピーがある。



各紙幣の絵柄の種類は多く、私が使った10ルピー紙幣だけでも4種類あった。紙幣をよく見ると4種類の様々な文字が使われている。

1961年の国勢調査で細分化すると162種の言語があることが判明し、現在は公用語を4種と定め採用しているらしい。(英語を入れて5種)



人口

インドの総人口は約9億だそう。政府は人口抑制の手段をいろいろと考えているらしいが人口は殖え続けているらしい。人口が殖えるということは食糧問題に直結する。この問題はかなり深刻なようである。

フレーズ

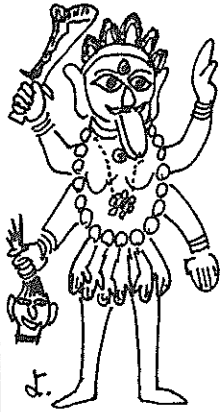
いたる所でよく耳にした言葉に「ノー・プロブレム」という言葉がある。問題ないとか、大丈夫という意味である。バスから煙が出ていても料理が床に落ちこぼれても、ミネラルウォーターの栓が抜けても、「ノー・プロブレム」これだと思わず笑ってしまふ。だが、その後栓がしっかり閉まっているものと交換してもらった。インドでは生水はもうろく、氷や切ったくだものは腹をこわすので、口にしない方がよいと思う。

国旗

赤(サフラン色)と白(平和)と緑(農民の国)の3色が使われ、まん中に法輪(ダルマ・チャクラ)が描かれている。これはブッダの説法がみな平等であるという意味が込められている。

ビークル

インドにはいろんな乗り物がある。列車、バス、タクシー、リキシャ(輪タク)、人力車の自転車版)、オートリキシャ(エンジンが付く)、ろばの馬車、らくだの馬車、舟、飛行機。自動車はインドが誇る。アンバサダー、トラックはインドでオネの財ばつTATAのブランドが強い。日本の軽もよく走っていた。



★1日目
2月2日
「東京
↓
デリー」

成田空港を午前10時に発ち、バンコク経由でデリーへ。約13時間かかるとインドに到着。入国手続きを済ませバスでホテルへ向かう。バスの中で500円分を両替する。(1ルピーが35円なので160ルピー) 午後8時30分(現地時間)アシヨカ・ホテルに到着。ホテルのレストラウンで乾杯した後、各部屋で休む。

◆初めて飲んだインドのビールは、ブラタラベルで、これが一番美味いという。クセがなく、イける味。

◆ヘッドメイキング

への枕銭は、10ルピー。

◆デリーはハリヤナ州にある。



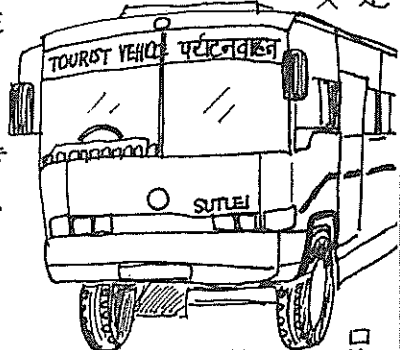
★2日目
2月3日
「デリー → パटना
→ ラジギール」

AM8:30にバスでドムステック・エアポートへ。空港はホテルから20分の所。霧が濃い。「飛行機、飛ばぬかな?」「飛ばません」といってタクシー(アバサターという自家用車)に分乗して近くのTHE CENTAUR HOTELというホテルへ行き、時間をつぶす。10:30頃からビールを飲む。(お坊さんはよく飲む人が多いです。)知らないうちにスープ、魚のフライ、持豆カレー(とても美味しい!)が出てくる。おさえぎみに食す。12:20空港へ戻る。結局まだ遅れていて14:37、ようやく飛行機のエンジンがかかる。だいぶ遅れたのでパटनाよりも250km南にあるランチャー・空港へも着陸した。そしてパटनाに着いたのは17:30(6時間の遅れ)ここからバスでラジギールの法華ホテルへ向かう。20:50ホテル着。すぐに夕飯を食べ、風呂に入る。後はバタンキュー。

今回の旅には、添乗員と現地ガイドが付く。日本からは水野さんという男性(2人、1月に3回も仕事でインドに来ているというベテラン)そして現地ガイドは、ジヤマルさんという男性。インドの大学を出ていて日本語もうまい。私のしつこい質問にもほとんど答えてくれた。たよりになる男、予定どおりに行かないのか? インドっぽい。この2人の臨機応変度は参考になる。

移動は足
観光バス

やたらと
クワコンを
鳴らしながら
猛スピードで
ぶとばす
クルの運転手
兄のアニール。



インド人の視力は6.0位だぞ。



口数少ない弟のソニール

運転はピカイチ!!

3日

2月4日

「ラジギール」

↓ブツダガヤ

ブツダガヤは釋尊成道の地

その後、竹林精舎へ向かう。ここはお釈迦さまが説法された所。名前のゆり竹は少ない。ホテルへ戻り、時に朝食をとる。(法華ホテルは日系なので、食事も日本風)その後、デー

な祭りに参加するために荷物をかかえて歩く人たちがあふれている。アニールのバスはククンを鳴らし、人々はギリギリでよける。途中、大勢の人が乗ったバスに道をふさがれる。みるみるバスは取りかこまれてしまった。ライフルを持っていくものもある。顔に化粧をした男たちがアニール兄弟が左右の窓を開けて何か言っている。そのうち、バスが動き出し、振り返った兄弟の顔には例の赤い粉がめらめらしていた。ブツダガヤ手前で尼蓮禅河と前正覚山を眺望する。その後、大菩提寺に参拝する。ここには52mの大塔がある。ヒンズー教神殿様式で、9層から成る精舎。そしてお釈迦さまが成道された(あやゆる苦悩からの解脱)すむわち「悟り」を開くに至った所金剛宝座でおとめする。17時アムカポテルへチェックイン。今日は坪内くんの29歳のバースデー。カレーとケーキで祝う。

前日の遅れを取り戻すため、5時起床。20分後には靈鷲山へ向け出発する。バスから降り、まっ暗な道でライトを持って登ること20分。山の名まじりの由来の就鳥の形をした岩が見えて山頂となる。全員くつを脱ぐ。(インドでは寺院や廟の中では土足禁止がほとんどである)この一番を歩いているインド人にお金を渡して、お線香をもらう。全員が供えたところで、嘆佛傷をおつとめする。この辺りは治安がよくないので、地元のポリスマンに同行してもらう。山をおりて、バエで王舎城跡とビンビサーラ王の牢獄跡を見学。50m四方の低い石垣の一角に5m四方のくぼみがある。ここが牢獄跡だ。

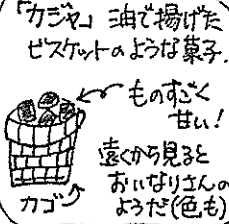
※1903年に大谷探険隊により発掘復元された。「無量寿経」の説かれた所。「観無量寿経」が再説された所。山頂(8m四方くらい)には香室(祠)が残り、お釈迦さまが「嘆佛傷」をおつとめする。全員の供え物を受け、お釈迦さまが「嘆佛傷」をおつとめする。元々のポリスマンに同行してもらう。山をおりて、バエで王舎城跡とビンビサーラ王の牢獄跡を見学。50m四方の低い石垣の一角に5m四方のくぼみがある。ここが牢獄跡だ。



山頂(8m四方くらい)には香室(祠)が残り、お釈迦さまが「嘆佛傷」をおつとめする。全員の供え物を受け、お釈迦さまが「嘆佛傷」をおつとめする。

【靈鷲山(グリドラ-クータ)】
 ※着闊(きやくわん)山ともいわれる。低い石垣の一角に5m四方のくぼみがある。ここが牢獄跡だ。

ラニダ仏教大学遺跡へ向かう。当時(5世紀)世界最大級の大学で、正信傷に出てくる龍樹菩薩が学ばれた。あり玄奘三蔵も滞在されたところである。広大な敷地の中にたくさんの赤レンガの建物が残っている。朝食はまたホテルで、日本風の朝食をすませ、ブツダガヤへ向かう。ホテルを出発してすぐ、子供に赤い粉を投げつけられる。安心がラスがあつて本当によかった。バスが走る道には、ブツダガヤという町の大きな



揚げた菓子。お釈迦さまが「嘆佛傷」をおつとめする。全員の供え物を受け、お釈迦さまが「嘆佛傷」をおつとめする。

ラジギールの佛跡をご紹介するにあたり、『観無量寿経』について、ざっと説明します。王舎城のアジヤセ王子が、お釈迦さまの従弟のクダバタタに、そのお父様、父のビンバシヤフ(ビンビサーラ)王を幽閉し、母のイダイケ夫人をも軟禁した悲劇を機縁として、苦悩するイダイケ夫人に対して説かれた経典。苦悩の中から浄土へ生まれることを願い、阿弥陀の本願に目覚めていくありさまが説かれている。救われるべき人間を苦悩する凡夫として、明らかになっている。

「お経(ストーリー)」とは、お釈迦さまの教えがまとめられたものという。経とは「継系」の意味で不変の真理を表わす。

4日目

2月5日

ブツダガマ

↓ベナレス

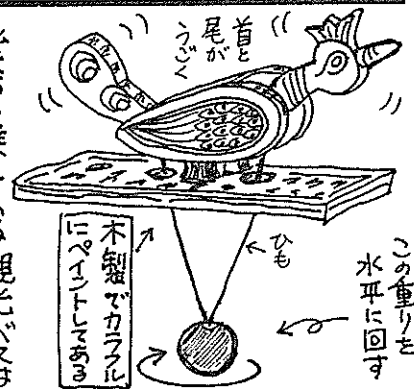
5時起床。(蚊の羽音で4時に目が覚める。)

私は今日で33歳になる。インドで誕生日を迎える、なんとも感慨深い。昨夜の坪内くんの誕生日の時、チキンカレーがあまりに美味しく3回もおかゆりをしたせいお腹をこわす。4日目にインドの洗礼を受ける。6時にベナレスに向けて出発する。道が悪いのでバスは大変に揺れる。遊園地の乗り物に「ずー」と乗っているようだ。道の両側には同じように、それでいて少しずつ移り変わる景色が続く。見ている飽きない。途中、素朴なドライブインに寄る。ここで本場の「チャイ」を飲む。大変ウマイ!! (ヤギの乳、ミルクティ)として又、バスに乗り込む。しばらく走る。次第にもよおしてきた。バスを止めてもうろう。(インドの田舎道ではトイレは草むらう等、適当な所で用を済ませる。濃い朝もやの中、川原の茂みにしゃがむ。皆、こちらを向いて笑っている。カメラをかまえて、笑いからもいた。「撮るナ」と言いつつ思わず、笑ってしまった。忘れられない誕生日となった。

サルナトは
初転法輪の地

お店じゃなくて
ストリート・ショップ・ینگ
が面白い!!

釋尊がはじめて法を説かれた



この車も
水平に回す

私たちの乗っている観光バスは非常に自立(田舎じゃこんなきれいなバスはない)ので各地に止まるとすぐ物売りが押しよせてくる。向こうはぶっかかり、こちらは値切る。本当の値段などない。気に入って値切って買った値段が真実。得をしように、だまされようがすべて自分の責任。右の土産ものちやで150ルピー也。

9時を回った。とんでもなく大きな川を渡っている。川幅は約4キロ(インドで3番目に大きい)ちなみにガンガー(カシミア河)は約7キロあるそうだ。少し走ると急にバスが止まってしまった。オイルが漏れているようだ。ノー・プロブレム! アニールが言いながら修理をはじめ。一面の小麦畑とからしの花(黄色)畑のまん中で待つこと30分。エンジンがかかり拍手が起る。10時半レストランに着く。カレーとナン(小麦で作られるパンのようなもの)を食す。14時、ガンガーを渡る。左にベナレスの町が見える。ベナレスに行く前にサルナト(鹿野苑)へ寄る。まずは博物館に入る。中にはアミョカ王柱頭(ライオン)頭が4つくっつき、初転法輪像などインドに至宝が展示されている。そして、「迎佛の塔」に登る。ここはかつて苦行を共にした5人の修行者がお釈迦さまを出迎えた場所といわれている。続いて二重円筒形の巨大な「クスター」を見える。(スターとは塔とか塚という意味)その後、ラガダ・クティ寺院へ参拝。皆で勤行する。金色のとても美しい佛像であった。寺院内には野生司香雪画伯の釋尊の生い立ちを描いた壁画がある。18時半グラークス・ベナレス(ホテル名)に到着。夕食の際、33歳の誕生を祝っていた。名前入りのケーキ、プレゼント、皆の拍手にまだ感動するばかりだった。

第5日目

2月6日

「ベナレス」

↓クシチガラ

5時起床。5時45分バスで「ガンガー」に着

く。あまりはまだ暗い。早朝はとも寒いの
でダウンジャケットを羽織る。20人乗りの手
こぎボートで川かうガート(石段)での沐浴を
見ておようという訳だ。ベナレスはヒンズー教
の聖地だそう。ヒンズー教徒が「清らかにし
て聖なる河」というガンガーはとも汚い。な
ぜ沐浴するのかわかるといえば、罪を清めて懺悔(ま
んげ)するのだそう。ここベナレスだけは南か
ら北に流れているらしい。河面には色々な建
物がびっしりと混在している。ガートの対岸の
空がま、赤に染まり、太陽が顔を出した。
とてもきれいな日の出である。しばらくして舟
をおりて、幅2kmの路地を歩く。売店や神様
そして牛などいろいろなものが、このせまい路地に
ひしめいている。少し広い道に出た。ガイドの
ジャマルくんがリキシャを何台も停めてい
る。ここからバス所まで少し短かいがリキシャ
に乗る。気分がいい。以外とスピードが出る。

クシナガラは

釋尊が入滅した地

ホテルにもどって朝食をとる。その後バスに乗りクシナガラを目指す。途中、ドローワーガートという所で昼食をとる。クシナガラの手前40キロあたりで左後輪内側がパンクする。「ノープロブレム」ゆっくり走るそう。16時半、パティクニワスロッヂ(今夜泊まる所)に到着。ロッヂの前にある涅槃堂へ参拝する。建物の中には全長61mのお釈迦さまが横にばらされている。全身が金色。50年前にアグラかう秘され、1978年発掘された。足の裏には法輪が刻まれている。全員で勤行する。続いて約1キロ東にあるラマバル・ストゥーパーへ歩いて行く。地元の子どもたちがゾロゾロついてくる。カワイイなアと頭をなでたとたん、手を出して「サラソ」。カクエン。(菩提樹の葉は百円)などと言って物売りに変身した。ここは釋尊の遺骸が茶毘に付された跡といわれ、高さ46mのカメの甲羅のような塚が作られている。近くには釋尊が最後の沐浴をされたといわれるヒラニヤヴァティー河が流れている。とてもものどかな所である。ロッヂに戻り、夕食、シャワーを済ませ2時に寝る。皆だんだん疲れが出てきたようだ。



のよう

「リキシャ」

簡単「チイ」の作り方

- ・アガムティー(茶葉)が合う!!
- ・牛乳(本場はヤブの乳)
- ・しょうが少々・砂糖
- ・ティーマサラ(ピル・スパの香辛料コーナーにあると思う)以上を用意

- ① 茶に牛乳を少し加熱
- ② 紅茶の葉を少し。適量(1人につきティースパニ杯が目)
- ③ しょうがをすりおろして入れる。
- ④ 砂糖を好みの量入れる。
- ⑤ スパイス(ティーマサラ)を入れる。
※これも好みの量で。
- ⑥ 茶はだに細かいアガが立って
きたら火を止め、茶ごと
出菜あがり!



★6日目

2月7日

「クシナガラ」 ルンビニ→ゴラクプール

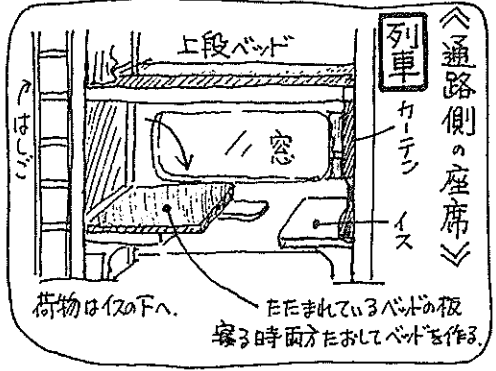
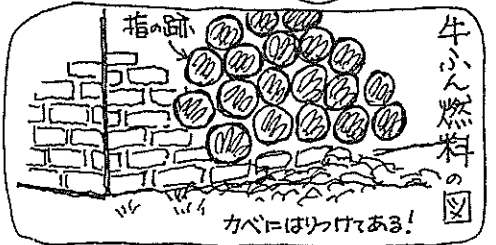
またまた5時起床。おかゆ、たまご焼き、チャイで腹を満たす。6時出発。バスの外は濃い霧が出ており幻想的だ。ただ今9時、ネパールの国境付近。渋滞している。あたりにはぎやかな商店街が、活気がある。国境は踏み切りのようなバーがあるだけ、ネパールに近くなるにつれて人々の顔もネパール顔になってくるのが面白い。スタッフの2人が出入国の手続きをしている間、ネパール側の町バラヘイマでチャイを飲む。今までにチャイを味わう中でこれが一番。手続き終了後バスで釋尊生誕の地ルンビニへ向う。道がすばらしくイセセンターラインまで引かれている(日本政府の援助)佛跡に至る。マヤ堂へ参拝する。小さな建物の中には、金色の釋尊像やマヤ夫人(母)の出産時の像等数点が安置されている。マヤ夫人の右脇から生まれた釋尊は大地におり立ち北に向かつて歩ありみ「天上天下唯我独尊」(私はこの世で誰とも代わることのできない尊い存在である)という誕生偈を唱えられたといわれる。

ルンビニは釋尊が生誕した地

そばには釋尊誕生沐浴の池と、巨大な菩提樹の木がある。マヤ堂内にて皆で勤行する。昼食はネパールの法華ホテルで。このホテルはどこの日本風である。休けいを取り、再びインドへ戻る。途中プルワリヤという村へ寄る。村の中を歩いてみる。子供たちが大勢ついてくる。立ち止まって後を振り向くと皆おどろいて逃げる。観光地とは無縁の純朴な子供たちである。田舎の方の村はレンガや土の建物が多い。興味を持ったのは「牛ふん燃料」道に落ちてくる牛ふんに泥やワラを混ぜあわせて練る。それを壁などに叩きつけて干し、乾けば出来あがりというものだ。称賛すべきリサイクル。村の大人も子供も皆で手を振って見送ってくれた。16時ゴラクプールの駅周辺に到着。この町は活気がある。ここまで私たちを連れてきてくれた運転手のアニールと助手のソニールに別れを告げる。このあと駅に入り列車に乗り込む。今夜はこの列車で眠るのである。

「チャイ」の屋台

しょうがをコップの底で叩いてつぶす。それを手どろみかへ。たの中にはヤギの乳と紅茶。それはスパイス。横でおかあちゃんが水をばた洗面器の中でコップをすすぎ。おやじがこれにチャイを入れて出してくれる。美味い腹をこわすきた。



通路側の座席
列車
カーテン
イス

荷物はいすの下へ。
たままれているバツの板
寝る時両方をしておいてバツを作る。

7日目

2月8日

列車 (ゴラクプール)
↓アグラ ↓デリー

2/7 17時 列車の席にすわる。寝台列車

なので座席が広く(ベッド兼長え) 4人掛け
6人乗々座られる。スーツケースは席の下へ入れる。
インドらしく1時間以上遅れて発車する。向
かい合わせの4人掛け(上下がベッドになる)と通路
をはさんで向かい合わせの2人掛けというブロック
がたたくま並んでいる。地元ガイドのジマールくん
を囲んでインドについて色々話す。私たちは次
の日午前3時ごろ「ツンドラ」という駅で降りる
そうだが、列車の寝も2時過ぎにお開き。そ
れぞい眠る準備に取りかかる。私の席は通路
側の下段なので両側の壁にたたんである板を
下ろしベッドを作る。奥に機能的に出来ており
無駄がない。寒いと思っただが以外に暑い。カーテン
を閉めて横になる。途中何度か駅に停まり
その度に通路を歩く人の腕やら荷物やらが
カーテン越しに私の体につつかる。午前3時
30分ツンドラ駅に至着。外はまだまっ暗だ。

アグラは
タジマハルに有名

「タジマハルと14人のメンバー」(私・右下2人)



なんとホームと列車の間が1mくらい離れている。しかたがないので手
荷物を持ってジャンプして降りる。時間が早いためバスでアグラ
のクラークスホテルへ行き、休けいをとる。4時30分、ホテルの部屋で
日本から持ってきた「カザラメシ」を3人で食す。ウマイ。8時に出
発して有名なタジマハルへと向かう。タジマハルは、ムガル
帝国第5代皇帝シャールジャハーンが、愛妻ムムターズの死を悼み
22年間(1631-1652年)かけて完成させた白大理石の巨大なお墓
である。世界遺産にも指定されており、手前にある大きな門まで行
くのにもガソリン車から電気バスに乗りかえるといった気の遣いよう
である。透かし彫りや象眼(大理石にふんだんに宝石がはめ込まれている)の造形が
とても美しく高度の技術がうかがえる。工事には毎日2万人が動員さ
れたという。出費は莫大なものであったろう。シャールジャハーンはタジ
マハルの背面を流れるヤムナ河に大理石の橋を架け、対岸にタジヒ
寸分たがぬ自分の墓を黒大理石で
作ることを計画していた。だが病いに
倒れ、アグラ城内に監禁(自分の息子
3男に王位をうばわれた)されて彼の夢は
突ることがなかった。彼の遺体は愛妻の
横に(タジマハルの中)置かれていたそうだが、
はだして大理石の上に長くいるとかなり
冷えてくる。この後アグラ城を見学。
赤い砂岩でできた非常に凝った作りだ。
アグラを出てデリーに向かう。

8日目

2月9日

「デリー」

↓ 東京

2/8 アグラからデリーへ向かう途中昼食をとる。クラークス・アグラというホテルで数種類のカレーとワインを食す。だいぶ辛さにも慣れてきた。16時ごろ、ゾウに乗れるドライブインがあるというので寄ってみる。ゾウに乗ることがないので乗しみにしていたが、お客を乗せて皆出はらうていた。残念。19時デリーに入ったが、渋滞でほとんど動かない。車線を逆行してくる車がいったり、信号りは守らないので、けっこうインドっぽい。20時アショカ・ホテルに至着。インド料理を味わった後、水野さんとジヤマルくんとの共通の知り合い(インド人)の結婚パーティーが同じホテルで行なわれているので、顔を出す。佛跡を旅してきたそのままのみずすぼらしい格好で、ゾロゾロと会場へ。中はすごい人数で歌や踊りで盛り上がりがあった。どうぞお幸せに。部屋へ戻り荷作りをする。お土産がかさばる。

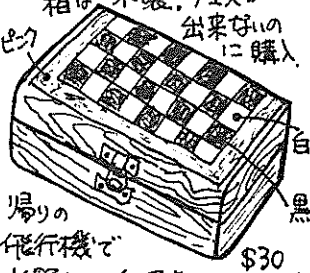
『ラジ・ガート』

マハトマ・ガンジーが火葬された場所。遺灰はベナレスまで運ばれ「ガンガン」に流された。*ガンジーはインドの父といわれ、人種差別にとり組んだ偉大な政治家。1948年テロに倒れ、79歳の生涯を終えた。

アンバサダー



大理石の象眼が美しい
ポータブル・チェス版。
箱は木製、チェスが
出来合いの
に購入。
白黒



帰りの飛行機で水野さんにチェスを教わる。将棋に似ている。
\$30 USD
90ルピー



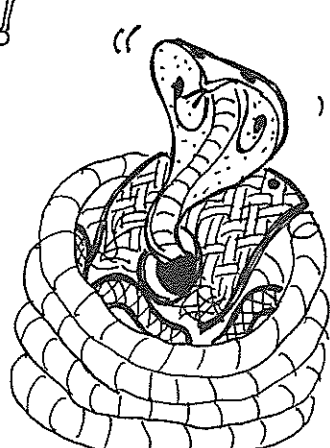
ナフキン ↑ 10ルピー

2/9 インドの旅最後の日。デリーの市内観光がある。オースタ大戦で亡くなったインド兵士を追悼して建てられた「インド門」、インド一の高さ(72m)を誇る「クトゥムブ・ミンナール」、未完で放置された「マラーイの塔」などを見学。夕方空港へ向かう。20時にインドを立ち、帰国の途へ。

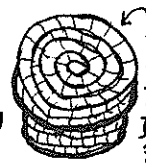


木製のチェス版

駒を動かす黒と白の部分は箱根細工のように寄せ木で作られている。150ルピー。



アグラ城付近で50ルピーで購入。(デリーで双子のコブラも購入)



フタを取ると

い草、よう

*当時 1ルピー = 3.5円

お釈迦さまの生涯

誕生

今から2500年前、北インド（現在のネパール・ルンビニ）で、釈迦族・カピラ城主マトダナ王とマヤ夫人との間に太子として誕生された。ゴータマ・シッダルタと名付けられ、母は出産後7日目に亡くなられた。

ある日、マヤ夫人は白い象が天から降りてきて、脇腹に入る不思議な夢をみて、懐妊された。出産のため実家に帰る途中、ルンビニ園で無憂樹の枝に手をかけた時にお生まれになったといわれている。

出家

ある日、城の東門を出て老人に会い、南門では病人、西門では葬式の列に出会った。そして「なぜ人間は老い、病気になり、死ぬのか。太子は深く考え込み、北門へ出た。そこで修行僧に会った。身なりは粗末だったが、表情が悦びに満ち満ちていた。太子は修行僧になつて、人間の苦悩を救う道を見つけたいと、29歳の時に、位を捨て、妻子をおいて出家された。

入滅

45年の間各地をまわって説法を続けられたお釈迦さまは、80歳の時、クシナガラで体調をくずされ、最後に「自らを灯とせよ、法を灯とせよ」という言葉を残され、多くの弟子に見守られながら、静かに涅槃に入られた。

成道

5人の仲間と共に厳しい苦行を6年間続けられたが、それでは悟りは得られないとひとり苦行林を出て沐浴し、村娘スジャータの乳粥で元気になられた。真の悟りをえようと菩提樹の木の下に座られ、深く自分をみつめながら、様々な煩惱と闘われた。それから7日目に悟りを開かれた。太子35歳。

説法

「ブツダ」となられたお釈迦さまは悟りの内容を人々に伝えるのは容易な事ではないと説法をためらっておられたが、意を決し、共に苦行した5人の仲間、最初の説法をされた。



「おかげさん」始まって以来の12ページという量にもかかわらず、いろいろと書きたいことが出てきて文字が小さく、読みにくくなりました。こと、お詫び申し上げます。

インド旅行中メモ帳をポケットに入れて、気がつくくと書き込んでいました。それが26ページあって、別冊を作るのにも役立ちました。この見聞録で「インドはこういう国だ……」などと語るつもりはないし、又、語れるものでもありません。ただ

実際にインドへ行って感じたのは、人々の生きるパワーがそこそこで、ニブに伝わってきたナ、という事です。又、様々なものをあえて統一せずにあるがままに生かしているといった印象を受けました。インドの底知れぬ不思議さ、面白さに興味が出てきて、アジアにはまりそうな予感がします。

ちなみに日本出版前に、おじが「河童が覗いたインド」(妹尾河童著 新潮文庫・590円)という本を教えてくれました。地元文化に密着したレポートと手書きの文章とスケッチ。アナログ派

の私にはとても参考になる面白い一冊となりました。皆様も一度ご覧になってみてはいかがでしょうか。

話は変わりますが、私はブツダガヤで日本にはないという「チベット菩提樹」の念珠を購入しました。周囲の人にもめずらしいと言われうかれています。たが旅の半年後、京都の念珠店で見かけた時は、ぼう然としてしまいました。一緋にインドへ行ったお坊さんには「自分が気に入ってれば、それでいいんだよ」となごさめられました。今もお気に入りで、一枚も二枚も上手でありました。 釋義祐

『おかげさん・別冊
印度見聞録』

発行日 1999.7.10 (仏成道暦・2530年)

発行 真宗大谷派・高德寺

編集 副住職・新井義雄

〒164-0002

東京都中野区上高田1-2-9

TEL. 03-3368-6947

FAX. 03-3362-8019